三燕金属製装身具の研究

大　谷　育　恵

I. 本論の目的

五胡十六国の時代、すなわち 4 世紀から 5 世紀初頭にかけての時期、中国遼寧省西部そして河北省北部は三燕と総称される鮮卑慕容部によって建国された国の領域であった。1950 年代以降、遼寧省朝陽市付近を流れる大凌河一帯で三燕期の墓葬と遺跡が発見され、調査研究が進められてきている。

三燕の墓葬からは透彫りした馬具や装身具といった金銅製製品が出土することが知られており、日本においても同地出土の金銅製製品は韓半島三国時代そして日本の古墳時代に出現する金銅製製品との関連、あるいは金工技術の伝播をめぐって注目されてきた。本論と関わる金銅製の装身具では、龍文の晋式帯金具について数多くの論考が発表されている。一方、中国においては、三燕の金属製装身具 (1) について比較的総体的に論じたものとして万欣の研究が挙げられる [万欣 2003]。しかし、三燕の装身具に関する研究は歩揺といった特色ある一部の装身具についての論考が中心で、取り上げられてこなかった装身具もあることから、やはり遼西地域で出土する装身具を総体的に論じることができていないというのが第一の問題点である。そして第二の問題点は、鮮卑研究の中で各遺跡群の文化類型の差を示す遺物の一つとして装身具の対比を示した例 [喬梁 1999] はあるものの、慕容鮮卑の遺跡という一つの枠組みがあるためか周辺地域を含めた上での装身具の比較研究が行われていないという点である。

そこで本論は魏晋南北朝期における服飾史としての観点から、三燕墓葬で出土している金属製装身具について現中国国内における出土資料を集成し、分布を示した上で、型式学的な検討、淵源関係としての系譜について考察する。集成にあたっては、これまで集成が提示されたことがない遺物もあるため、博物館等コレクションに収蔵されている資料についても参考資料として集成に加え提示する。

まず、最初に装身具の体系的な種別分類について提示したい。装身具は装飾部位と用途に密接な関係があるため、装飾する体の部分にしたがって頭飾、耳飾、頸部飾、帯飾に分け、これに装飾部位と用途を確定できない飾板を牌飾として総称し、装身具全体を 5 種類に分類している。この分類にしたがって分類した個々の装身具について、以下考察を加えることとする。

II. 各装身具の集成と考察

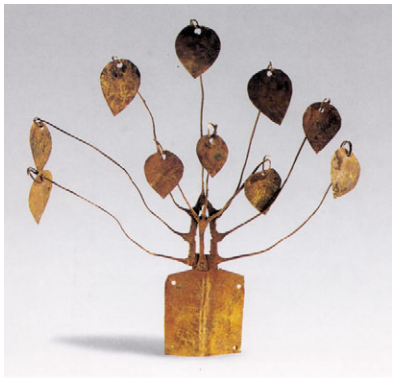
1. 頭飾

(1) 歩揺

歩揺とは、揺れ動く金片を多用した頭飾である。三燕を建国した鮮卑慕容部は歩揺を好んだことからその名があるといい (2)、三燕期の墓葬からは歩揺に比定される遺物が出土している。

歩揺に関する研究としては、孫国平 [1981]、孫機 [1991]、万欣 [2003]、毛利光 [2006] がある。孫国平は鮮卑の金冠飾を 6 種に分類し、このうち花樹状、花蔓状、頂花状の 3 種を歩揺冠とした。その後、万欣が再び歩揺について論じており、11 墓葬で出土した歩揺 16 点を挙げている。しかし問題なのは、両者の研究で列記されている大半の歩揺について、写真か図の報告がないことから実体がつかめないことである。写真あるいは図が明らかになっている歩揺は、房身村 2 号墓、十二台磚廠 8713 号墓、甜草溝 1 号墓と 2 号墓、喇嘛洞（らまどう）Ⅰ 7 号墓、馮素弗（ふうそふつ）墓出土資料の合計 7 点のみであり、これに参考資料としてピエール・ウルドゥリー・コレクションに収蔵されている 1 点が加わる (図 1)。

以上 8 点の歩揺は形状より 2 種類に分けられる。馮素弗墓以外の 7 点は、肩がやや弧をえがく方形の基座とその上部が樹状になった平面的なもので、これは孫国平が花樹状と定義した歩揺にあたる。基座の中心線はいずれも突出し、喇嘛洞Ⅰ 7 号墓出土資料以外は左右に 2 つずつ三葉文の透孔を入れる。基座周囲には列点文を施し、装着のための小孔をあけたものも



1. 喇嘛洞ⅠM17

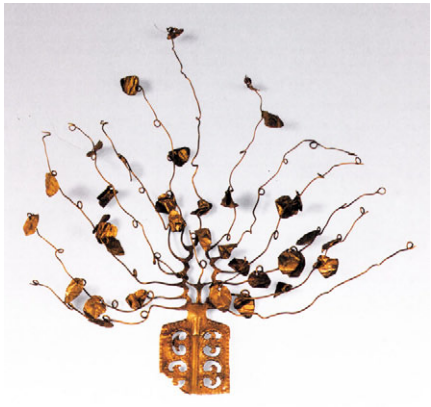
2. 十二台M8713

3. Pierre Uldry collection

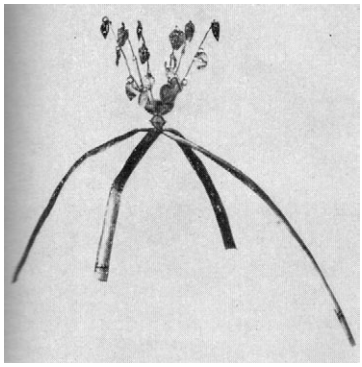
4. 甜草溝M1

5. 甜草溝M2

6. 房身村M2(小)



7. 房身村M2(大)



8. 馮素弗墓

9. 達茂明安連合旗西河子公社窖蔵

図1　歩摇

ある。樹状部の形状は、甜草溝 2 号墓出土資料のみその他 6 点と異なっている。前者は蛇行する中心軸から左右に 4 本の枝を出し、枝先が箒状に分かれたその一本一本に 1 枚の金片を下げているのに対して、後者は火炎状の空隙を入れた主幹周囲から直接のびた枝に数枚の金片を連続して通し、一度ひねって固定している。そして、いずれの歩揺も樹状部分と基座の境目付近に小さな枝をリベット接合によって付ける場合が多い。

馮素弗墓出土の歩揺 (図 1-8) は、弧状の金片が十字形に交差した金冠の頂部に付くもので、孫国平が頂花状と定義した歩揺である。半球の合わせ目が鍔状に張り出したやや扁平な球の上に、前方を欠いだ鉢状の座がのる。座の周縁からは 6 本の枝が広がり、1 本につき 3 枚の金片を通し、一度ひねってとめている。

以上の歩揺は、『晋書』馮跋載記の記載から卒年が太平 7 年 (415 年) と判明する馮素弗墓が北燕期の墓葬 (三燕 3 期) である以外は、前燕・後燕期に相当する三燕 2 期の墓葬から出土している。東 [2003] は基座肩部の形状と樹状基底部の形態から、毛利光 [2006] は火炎状の空隙と枝の数から歩揺の型式的な変遷を考察している。その結果、枝数が多いものから少ないものへの変化を指摘している。詳細が不明な歩揺が多いため、ここでは 2 期と 3 期で形態の異なる歩揺が出土しているということのみ確認しておきたい。

遼西の三燕期の墓葬以外で歩揺が出土した例が 1 例ある。北魏期と報告されている内蒙古達爾罕茂明安連合旗西河子郷の窖蔵で二種類の歩揺が各 2 点出土した [陸・陳 1984](図 1-9)。金牛頭鹿角飾とよばれている歩揺は基部となる動物の面部が幅広い盾形をしたもので、角部は別作りである。面部は金粒細工と各色石料の象嵌によって装飾され、額部分にあけた 4 つの穴には下段外側の 2 つには葉が 1 つ付いた耳、内側 2 つの孔には角が差し込まれている。角は 4 叉に分かれる太い角 2 本と内側の短く細い湾曲した角 2 本から構成され、最下部で一体になっている。もう 1 種類の金馬頭鹿角飾とよばれている歩揺は、動物の面部は狭く、面部・耳・角が一体である。角は中央の 1 本と 3 叉に分かれる左右 2 本の合計 3 本で、葉の周縁には列点を打ち出している。金粒細工と各色石料の象嵌を用いた装飾は前件と同様であるが、装飾は角部にも及んでいる。耳の付け根の下に切り込みがあり、鼻の左右には穿孔がある。各色石料を象嵌している点から、報告が指摘するように北魏期、あるいは北朝期まで含めた時期の遺物と考えられるだろう。

(2) 金璫

金璫とは、冠につける金製の飾板のことである。このうち蝉文の金璫は『帝王図巻』(図 2) や唐の恵荘太子墓の壁画人物像といった絵画図像資料、ならびに文献資料中からその存在が知られ、中野 [1976]、戸川 [1979]、孫機 [1989] の研究がある。服装の規定を記した輿服志の記載からは「武冠」あるいは「武弁大冠」に貂の尾とともに着けたことが知られ、特に皇帝に近侍する侍臣である侍中と中常侍が着用したことが知られる [戸川 1979]。この「金璫」「貂蝉」という言葉と同じく、金璫を指しているのではないかと思われる語が、『晋書』輿服志の天子のかぶる通天冠の規定にみえる「金博山述」と「金博山顔」である。張学鋒は「金博山述」「金博山顔」は通天冠の正面の位置に付ける山形の飾板のことを指し、蝉文金璫は天子の通天冠と重臣の武冠の両方に使用されたと述べている [張学鋒 2008]。

まず出土した蝉文金璫の基本的な表現を確認すると、外形は五角形様の蓮弁状で、俯瞰した蝉の図像を表す。両眼を大きな金球で表現し、顔の左右には先が 2 つに分かれて共に内側にまいた蕨手状のもの 1 本と、L 字形に屈曲したのち先端が渦状にまいた脚各 3 本を左右対称に配置している。金璫の構造は、蝉文様を透彫りして金粒を施した前板とそれを裏打ちする裏板の 2 枚から構成される。前板は外周に三角形の舌が切り出されており、これを折り返すことによって裏板を固定している。

図 2 『帝王図巻』晋武帝司馬炎

蝉文金璫の研究は以上のように行われていたが、金璫研究の進展の上で注目されるのが南京大学北園晋墓出

[A]

287 年以降
1. 洗硯池 M1 西室 :24

6. 個人蔵

289 年以降
2. 洗硯池 M1 東室 :102

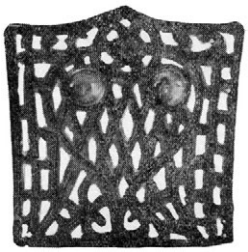
7. 久保惣記念美術館

3. 仙鶴観 M6:42

8. 大和文華館

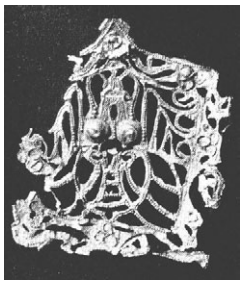
371 年
4. 郭家山 M12:13

9. Pierre Uldry collection



415 年　5. 馮素弗墓

[B]



369 年
10. 敦煌晋墓 60M1

11. 地埂坡 M4

12. 臨河出土

13. Pierre Uldry collection

14. 白鶴美術館蔵

15. 個人蔵

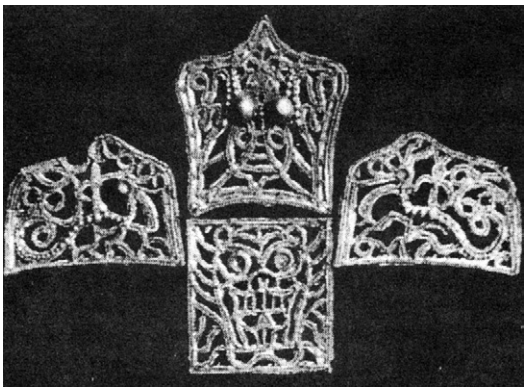
16. 大和文華館

17. 歴史民俗博物館
(A-545)

18. 白鶴美術館蔵

19. C. T. Loo collection

図 3　蝉文金璫

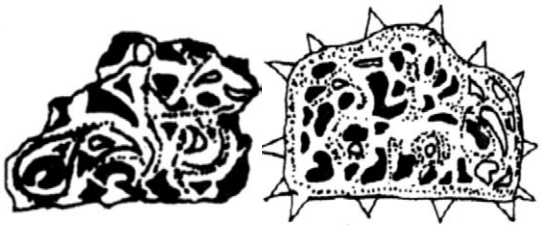


南京大学北園晋墓

図 4　金璫一式

301 年 劉宝墓

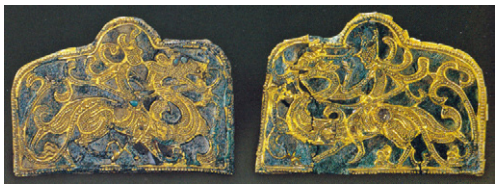
図 5　獣面金璫



301 年
1. 劉宝墓

324 年
2. 張鎮墓

371 年
3. 郭家山 M12:14



4. ギメ美術館（AA 17 a-b）

5. 個人蔵

6. 鄂城六朝墓 M2112:11

7. Pierre Uldry collection

8. Pierre Uldry collection

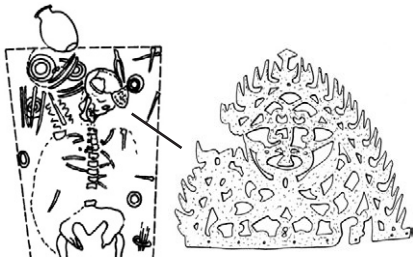
415 年
9. 馮素弗墓

図 6　騎龍羽人金璫

1. 大和文華館

2. ストックレー・コレクション

3. Simon Kwan collection



4. 大同南郊 M109:10

図 7　対鳳文金璫

表1　金璫一覧

No.	資料	所在地	年代	蝉	獣	騎	文献	備考	図版
1	馮素弗墓	遼寧省北票県西官営子	太平7年[415]北燕	2	－	－	『文物』1973-3,p.25図47-6,p.33図版1-2、『三燕文物精粋』7	『晋書』馮跋載記、北燕太平7年(415)没	図3-5
2	臨河出土	北京市順義区臨河出土	北朝	1	－	－	首都博物館蔵、同館展示	臨河墓地は『中国文物地図』参照/展示キャプションは北魏	図3-12
3	敦煌晋墓60M1(張弘妻汜心墓)	甘粛省敦煌県新店台付近	升平13年[369]前涼	1	－	－	『考古』1974-3図版7-3	被盗掘/「升平十三年潤月甲子朔廿一壬寅張弘妻汜心」朱書瓶/『晋書』張軌伝、『十六国春秋輯補』に弘の記事あり(351戦死)	図3-10
4	地埂坡M4	甘粛省高台県羅城郷河西村地埂坡	魏晋期	1	－	－	『2007中国重要考古発現』p.91	地埂坡の一部墓葬(M2)は『文物』2008-9報告	図3-11
5	洗硯池M1西室(M1西内:24)	山東省臨沂市洗硯池街	西晋晩期or東晋早期/太康10年[289]以降	4	－	－	『文物』2005-7表紙（4点中1点のみ写真あり/他不明）	弩銘文「正始2年[241]」,漆器銘「太康7年[286]」「太康8年[287]」	図3-1
6	洗硯池M1東室(M1東室:102)	山東省臨沂市洗硯池街		5	－	－	『文物』2005-7,p.14図22（5点中1点のみ写真あり/他不明）	漆器銘「太康7年[286]」「太康10年[289]」	図3-2
7	劉宝[道真]墓(ZGJM1)	山東省鄒城市郭里鎮独山村	永康2年[301]西晋	－	1	2	『文物』2005-1,p.23図54-9	侍従,使持節,安北大将軍,領御烏桓校尉,都督,幽并州諸軍事,関内侯	図5
8	仙鶴観M6西側木棺(M6:42)	江蘇省南京市栖霞区仙林農牧場	東晋早期	1	－	－	『文物』2001-3,p.17図42,p16図41、『六朝風采』No.145	高崧父の高悝墓と推定/附近の仙鶴観M2は墓誌より高崧(泰和元年[366])・高崧夫人(永和11年[355]卒、永和12年[356]葬)合葬墓	図3-3
9	南京大学北園墓	江蘇省南京市江口路22号	東晋早期	1	1	2	『文物』1973-4、『文史』2008-1,p.43図7		図4
10	郭家山M12(温式之・妻荀氏墓)	江蘇省南京市下関区郭家山	太和6年[371]東晋	1	－	1	『考古』2008-6図版3-3、『2001中国重要考古発現』p.104	散騎常侍,新建開国侯,太原郡祁県郷(都)郷仁義郷,温式之[嶠]	図3-4
11	張鎮[羲遠]墓	江蘇省蘇州市呉中区甫真鎮	太寧3年[325]東晋	－	－	1	『中国☆美の十字路展図録』、*China Dawn of Golden Age*, p.111、『文博通訊』27	散騎常侍,建威将軍,蒼梧,呉二郡太守,奉車都尉/『世説新語・排調篇』注の張蒼梧碑に記載	図6-2
12	鄂城M2112:11(六三〇M10)	湖北省鄂州市古墳堆	東晋前期	－	－	1	『鄂城六朝墓』彩版14,p.257図196-11		図6-2
13	Pierre Uldry collection	－	(六朝)	1			*Chinesisches Gold und Silber*, No.116	リートベルク博物館蔵(Rietberg Museum,Zürich)	図3-13
14	Pierre Uldry collection	－	(六朝)	1			*Chinesisches Gold und Silber*, No.117下	リートベルク博物館蔵(Rietberg Museum,Zürich)	図3-9
15	久保惣記念美術館	－	(六朝)	1			『第三次久保惣コレクション』図版編No.252	蝉眼球の片方は後補	図3-7
16	白鶴美術館蔵	－	(六朝)	1			『六朝の美術』図版34、『白鶴美術館名品選』No.70		図3-18
17	白鶴美術館蔵	－	(六朝)	1			『六朝の美術』図版164、『白鶴美術館名品選』No.7		図3-14
18	個人蔵	－	(六朝)	1			『六朝の文物』図版33右		図3-6
19	個人蔵	－	(六朝)	1			『六朝の文物』図版33左		図3-15
20	天理参考館	－	(六朝)	1			『六朝の文物』p.189記載		－
21	国立歴史民族博物館(A-545)	－	(六朝)	1			『アジアの境界を越えて』p.12		図3-17
22	大和文華館(図版5a,上段左)	－	(六朝)	1			『大和文華』16,p.73図4-A,図版V左上、『吉祥』p.91pic.66左		図3-16左
23	大和文華館(図版5b,上段右)	－	(六朝)	1			『大和文華』16,p.73図4-B,図版V右上		図3-16右
24	大和文華館(図版8c,下段右)	－	(六朝)	1			『大和文華』16,p.73図4-C,図版Ⅷ左下、『吉祥』p.91pic.66右		図3-8
25	C.T.Loo collection	－	(唐?)	1			*Exhibition of Chinese Arts* 1941-42,No.212、*Catalogue of the International Exhibition of Chinese Art*, p.66,No.705		図3-19
26	大和文華館(図版8d,上段左)	－	(六朝)	鳳1			『大和文華』16,p.73図4-D,図版Ⅷ右上		図7-1
27	ストックレー・コレクション	－	(六朝)	鳳1			*Asiatic Art*,pl.47, p.175	Stoclet collection, Brussels	図7-2
28	Simon Kwan collection	－	(六朝)	鳳1			*Orientations* vol.28-6(June1997)		図7-3
29	Pierre Uldry collection	－	(北朝?)	鳳1			*Chinesisches Gold und Silber*,No.124	火炎文に側視鳳凰文	－
30	石橋村出土	陝西省咸陽市渭城鎮石橋村	唐	鳳1			咸陽市博物館展出	鳳凰は1羽(単鳳)	－
31	個人蔵	－	(六朝)			1	『六朝の美術』図版166		図6-5
32	ギメ美術館(AA 171 a-b)	－	(六朝)			2	*Mongolie*,p.213、*L'Asie des Steppes*,No.145		図6-4
33	Pierre Uldry collection	－	(六朝)			1	*Chinesisches Gold und Silber*,No.115	リートベルク博物館蔵(Rietberg Museum,Zürich)	図6-8
34	Pierre Uldry collection	－	(六朝)			1	*Chinesisches Gold und Silber*,No.117上	リートベルク博物館蔵(Rietberg Museum,Zürich)	図6-7

紀年墓を基にした金璫編年　:
（下線:蝉紋金璫出土）

[A]　〈西晋末～東晋初〉
289年以降　洗硯池1号墓(東室)
301年　劉宝墓
→　〈東晋〉
324年　張鎮墓
仙鶴観6号墓
→　371年　郭家山12号墓(温式之・妻荀氏合葬墓)
南京大学北園晋墓、鄂城2112号墓
→　〈北燕〉
415年　馮素弗墓

[B]　？……　〈西涼〉
361年　敦煌晋墓60M1(張弘妻汜心墓)

土資料である。南京大学北園晋墓は『文物』1973 年 4 期で墓葬が報告されたが、その段階では金璫として認識されておらず、また文章記載のみであった [南京大学 1973]。最近になって張学鋒が金璫であることを指摘し、一括資料の写真が公表された (図 4)。北園晋墓出土の一括資料 (3) は、蝉文金璫 1 点に加えて、外形が正方形の獣面文を表現した金璫 1 点、横に幅広い山字形ともいうべき外形をした、龍に騎乗する羽の生えた仙人を表現した金璫 2 点の合計 4 枚からなる。これによって、冠正面の位置にくる蝉文金璫と共に冠飾を構成する、外形の異なる 2 種類の金璫の存在が出土資料から明らかになった。

以上をふまえて、蝉文金璫と北園晋墓で明らかになった 2 種類の金璫を集成し、紀年墓出土資料を基準として型式学的検討を加えて編年を行った (表 1)。文献中に現れる蝉文金璫の最も早い記載は『漢書』武五子・燕刺王劉旦伝にあるが (4)、漢墓からの出土例は確認できず、金璫が出土した最も年代の早い墓葬は西晋後期～東晋初期の墓葬である。蝉文金璫はまず最初に、外区文様帯が唐草文か否かによって 2 つのグループに分けることができる (図 3)。唐草文帯をもたない一群 (A 群) はいずれも黄河以南の墓葬から出土した資料であるのに対して、唐草文帯をもつ一群 (B 群) はいずれも黄河以北に所在する墓から出土している。そして A 群の場合、外区は外形にそって金粒列のみがある幅の狭い外区が早い段階、次に金粒で三角形全体をうめた鋸歯文帯が出現し、次第に年代が下るにつれて鋸歯の間隔が開いてくる。蝉文にみられる変化では､編年のポイントは太和 6 年 (371 年) の紀年をもつ郭家山 12 号墓の資料で、脚は 2 本へと数を減らし、金粒は特に体の主要部分で大きなものを使用するようになっている。また、胴体と羽の重なり部分が消え、蝉の羽表現が簡略化する。この郭家山 12 号墓の資料によく似た蝉文金璫が北園晋墓出土品で､両者には近い年代が与えられる。そして、最後に北燕期の墓葬である馮素弗墓で出土した 2 点の資料がくる (図 3-5)。眼があることから蝉文金璫であることが判明するが、蝉文様は原形をとどめていない。金粒細工の手法は透彫りした文様に沿って巡らせた金属線の両側に金粒を並べたもので、三燕で出土する金工品にみられる特徴であることから、遼西地区で制作したことが考えられる。

そして獣面文金璫は 1 遺跡 (図 5)、騎龍羽人金璫は 5 遺跡 (図 6) で出土している。資料数の多い羽人騎龍金璫について、紀年墓出土の資料を基準として文様の硬化や崩れから型式学的な変遷を考えると、蝉文金璫と同じく郭家山 12 号墓の段階で大きな変容がみられる。金粒細工の点では、細かな金粒で文様内をうめることによって文様を表現していたのが、文様の主要部分に列状に金粒を並べるように変化し、粒のサイズも大きくなる点は、蝉文金璫の場合と同じ変化の流れである。多少の個体差があるものの透彫り文様の崩れが進み、特に龍の尾を大きな金粒を並べて表現する点が目立つことから、郭家山 12 号墓と近い段階の資料として北園晋墓と鄂城 2112 号墓の資料が位置づけられる。

三燕では獣面文金璫と騎龍羽人金璫は出土していないが、騎龍羽人金璫に外形が最も近い山字形の金璫が馮素弗墓で 1 点出土している (図 6-9)。跪坐した人物像の文様は他に例がなく、1 本の金線を連続して通し、円形の金片で装飾する製作法は三燕の制作技法であることから、遼西地区で制作されたと考えられる。

最後に、外形は蝉文金璫と同じ蓮弁形で、相対する鳳凰文の金璫があることを付け加えておく (図 7)(5)。3 点は出土資料ではないが、鳳凰文の頭飾としては北魏平城期の墓葬である山西省大同市の大同南郊 109 号墓で被葬者の額の位置から出土した例がある (図 7-4)。少なくとも文様的には影響関係を認めたい。

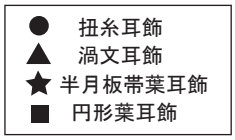
2. 耳飾

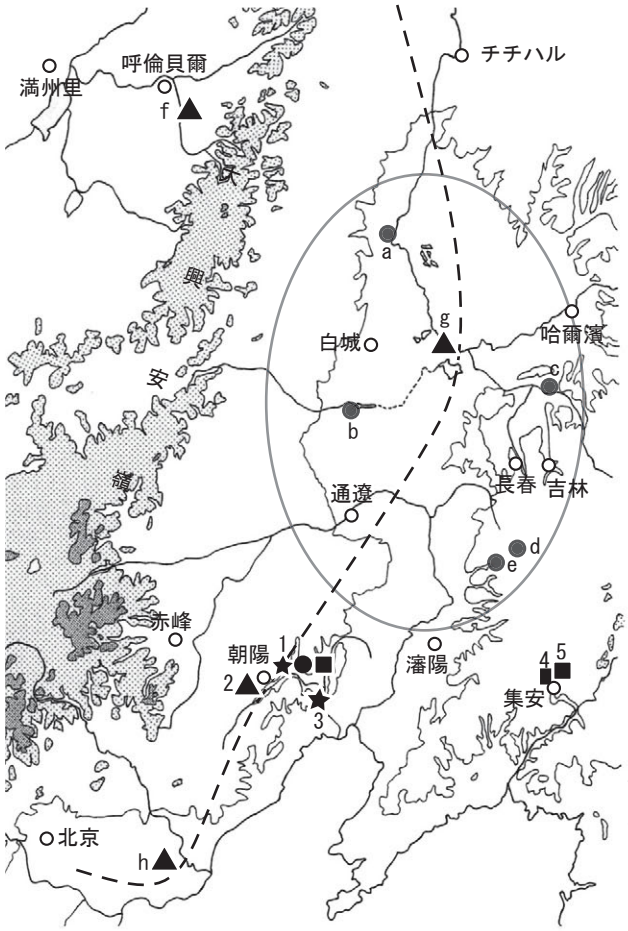
ここで耳飾としてとりあげるのは、装飾用の下垂部をもつドロップ式の耳飾である。遼西の三燕期の遺跡では 3 型式の耳飾が 2 遺跡で出土している。

まず、喇嘛洞遺跡の 3 墓葬で扭絲(じゅうし)帯葉耳飾が出土している (図 8-2)。扭絲帯葉耳飾は扭絲耳飾の一型式である。扭絲耳飾とは一本の金属線をねじり合わせて制作した耳飾で、共に上部にくる金属線両端の一方で装着用の鈎を作り出し、もう一方は花弁状に幅広く作られる。金属線のねじり合わせ方や珠の通し方によって様々なバリエーションが生まれ、全部で 4 式に分類できる (図 8)(6)。このうち D 式が、金片 (葉) を下垂する扭絲帯葉耳飾で、老河深(ろうかしん)墓地中層と喇嘛洞墓地の 2 遺跡で出土している。しかし、老河深出土の 2 点は平面的であるのに対して、喇嘛洞出土の 4 点は中心軸か

単環耳飾

渦文耳飾

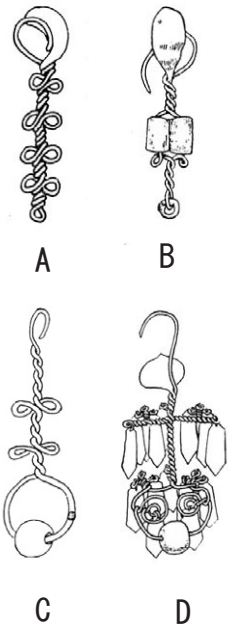




1. 喇嘛洞　2. 袁台子　3. 保安寺
4. 望江楼　5. 七星墓区

a. 平洋　b. 氈匠舗　c. 老河深
d. 彩嵐　e. 西岔溝　f. 扎賚諾爾
g. 後宝地　h. 塔坨

耳飾分布図



扭絲耳飾

袁台子陶范7

袁台子陶范8

袁台子陶范9

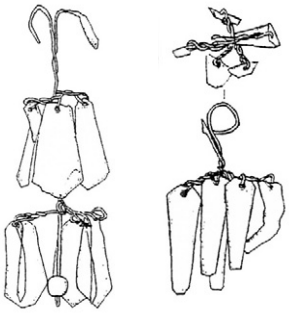
1. 渦紋耳飾陶范

喇嘛洞Ⅰ M17

喇嘛洞Ⅱ M198

保安寺石槨墓

3. 半月板帯葉耳飾



喇嘛洞Ⅱ M266:82　喇嘛洞Ⅱ M379:9

2. 扭糸帯葉耳飾

喇嘛洞Ⅱ M71

七星山墓区徴収

集安出土

4. 円形葉耳飾

図8　耳飾集成

ら金片を下垂する枝を各方面に張り出した立体的デザインであるという違いがある。扭絲耳飾自体は東北平原で後漢中期以降の遺跡から出土しており、喇嘛洞の扭絲帯葉耳飾は扭絲耳飾の系譜に連なる最も後出の例である。

次に半月板帯葉耳飾 (図 8-3) は、半円形の金属板の弦にそって 6 ～ 7 個の孔をあけ、細長い圭形の金片を鎖によってつないだ耳飾である。上部の円形環には切れ目がなく、この環を直接耳環とすることはできない。この耳飾は喇嘛洞Ⅱ 198 号墓と保安寺石槨墓の 2 墓葬で出土している。

最後の円形帯葉耳飾 (図 8-4) は、小さな円形の金片を鎖によって環につないだ耳飾である。喇嘛洞Ⅱ 71 号墓と吉林省集安県の 2 つの高句麗墓地から出土している。

そして、近年朝陽市柳城鎮の袁台子で発見された金属製装身具に関する興味深い資料 [于・孫 2009] について言及しなければならない。それは装身具を鋳造するための 9 点の陶范で、このうち標本 7 ～ 9 の 3 点が耳飾の范である (図 8-1)。金属製装身具の製品ではなく、生産に関連する遺物が報告されたのはこれが初めてであり、製作地の一端が明らかになった。そして、報告が「環形五連火炎文」図案の范としている標本 7 ～ 9 の 3 点の范は、その文様から見て渦文耳飾に関連する范である。渦文耳飾とは、上部に装着のための鈎を作り出し、左右対称の配置を基本とする渦文で垂下部を装飾した耳飾である。3 点の陶范は渦文が巴文に変化しているが、左右対称の巴文の配置や垂下部の中心部分に円点文を入れた点は渦文耳飾と共通する。しかしながら、この范と同じ文様の耳飾自体は知られていない。

まとめとして遼西地区の三燕墓葬で出土した 3 種類の耳飾と耳飾陶范の意義について考察すると、喇嘛洞遺跡で出土した扭絲帯葉耳飾は後漢中期以降に東北平原に分布した扭絲耳飾の系譜に連なる耳飾と位置づけられる。喇嘛洞墓地は三燕期の慕容鮮卑の遺跡であるが、一方で同墓地は漢や扶余の文化的要素を含んでいることが指摘されている [遼寧省文物考古研究所 2004]。老河深墓地中層は扶余の遺跡と考えられており、喇嘛洞遺跡で出土する扭絲帯葉耳飾はその扶余系要素の一つと言えるかもしれない。

一方、巴文の范と同一文様の耳飾製品は知られていないものの、袁台子で出土した陶范 3 点は渦文耳飾の範疇で、その後出亜種として理解される。渦文耳飾は飛地的に存在する 2 遺跡があるものの [(7)]、蒙古高原と東北平原を隔てる大興安嶺西側に分布し、9 遺跡で 18 点が出土している。また、同時期には渦文耳飾と同じく大興安嶺以西に分布域を持つ耳飾として単環耳飾が存在し [(8)]、大興安嶺をはさんで内蒙古高原側では渦文耳飾と単環耳飾、東北平原では扭絲耳飾と分布の分かれる状況がみられる。渦文耳飾本来の分布圏外にある袁台子から陶范が出土したは、渦文耳飾が三燕側に取り込まれていた可能性を示している。

そして、半月板帯葉耳飾と円形葉耳飾は三燕期に遼西地域で初めて登場する耳飾である。円形葉耳飾は高句麗の墓葬から出土しているが、墓葬についての具体的な報告はないため淵源関係等は不明である。

3. 頸部飾

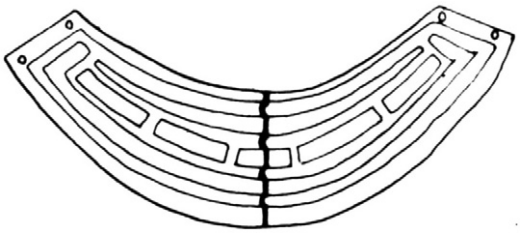
三日月の両端を切り取った形をした板飾が十二台磚廠 9022 号墓と房身村 2 号墓の 2 墓葬で出土している (図 9)。報告では月牙形金牌飾あるいは半月形金牌飾と呼んでおり、冠飾あるいは佩玉の璜であるという意見が提出されている。出土状況から頸部飾と確定することはできないものの [(9)]、山西省北部や内蒙古、モンゴル国で出土している遺物との比較から頸部飾と考えられる。

蒙古高原側の頸部飾は遼西地区の頸部飾と形が異なっている。蒙古高原側の頸部飾も三日月形をしているが両端は切り取られておらず、外弧の中央部分に四角形の張り出し部がある。そして左右の先には孔 1 つが穿たれるか、片側へ巻かれている。この形の飾板が頸部飾であることは、大同南郊 208 号墓の被葬者頸部で出土していることから裏付けられる (図 9-5)。大同南郊 208 号墓出土品の裏には絹織物が遺存していたという。

遼西出土の頸部飾は、切りとりで生じた左右両端の辺に装着のための孔 2 ～ 3 個をあけている。同様の遺物は朝陽市博物館とピエール・ウルドゥリー・コレクションに各 1 点が収蔵されており (図 9-4)、その形態から三燕の頸部飾に比定できるが、出土例を合わせた 4 例中に同じ文様の頸部飾はない。

4. 帯飾

［遼西］

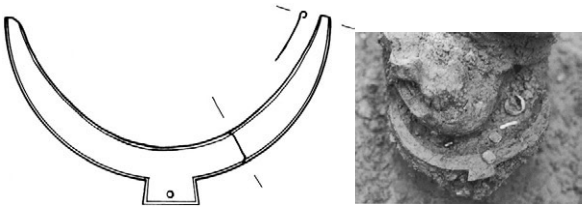


1. 十二台郷磚廠 M9022:8

2. 房身 M2

3. 朝陽市博物館蔵

［内蒙古中南部］



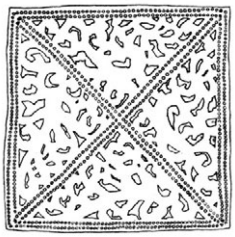
5. 大同南郊 M208:10 と出土状況

6. 内蒙古畢克斉鎮出土

4. Pierre Uldry collection

図 8　頸部飾

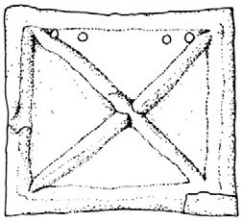
1. 房身 M2



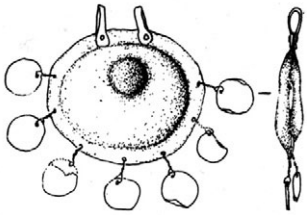
2. 甜草溝 M1:9

1. 甜草溝 M1

3. 甜草溝 M1:8



4. 甜草溝 M2:39



2. 甜草溝 M2:26

3. Pierre Uldry collection

5. Pierre Uldry collection

図 9　方形板

甜草溝 M1:7

図 10　半月形飾

4. Pierre Uldry collection

図 11　楕円形懸飾

三燕で出土している帯金具は、いわゆる龍文系の晋式帯金具と草葉文系の帯金具の二種類があり、前者は 4 遺跡で 7 点、後者は 2 遺跡で 3 点出土している。帯金具については日本においてすでに多くの研究があり、三燕出土の帯金具についても藤井 [2002,2003] が詳しく論じている。三燕の帯金具について、喇嘛洞Ⅱ 275 号墓の帯を搬入品、それ以外は遼西で制作された製品とみることについては異論がない。ここでは三燕と他地域との比較という観点から集成結果を示すこととし (表 2)、以下二点について付け加えておきたい。

晋式帯金具についての近年の新たな動きとしては、江蘇省の 2 基の呉墓で新たに晋式帯金具が発見されたことが挙げられる。薛秋墓出土の龍文鉸具は、帯通し穴の刺針側の透板先端に突起がある点が従来早い年代を与えられた周處墓、天理参考館例と共通するものの、龍文は細部を表現していない。また、銙でも今までに出土している銙とは文様構成が異なっている。呉墓での出土例が明らかになったことから、編年や晋式帯金具の成立と製作地について検討が望まれる。もう一点は、山西省右玉県の善家堡遺跡で鉄製帯金具一式と青銅製の草葉文系の銙が出土していることである [10]。鉄製帯金具の詳細は不明であるが、北方での出土例として注目され、喇嘛洞Ⅱ 196 号墓出土の草葉文の金銅製帯金具との比較ができる資料ではないかと思われる。

5. 牌飾

使用用途と位置を確定できない飾板類を牌飾として分類した。牌飾は形状にしたがって 4 種類に分けることができる。

(1) 正方形透飾

正方形の金属片で、対角線を結んで 4 分割した区画の中に鳳凰か龍を透彫りしたものである [11]。連続して通した金線に円形金片を通して加飾したものもある。房身 1 号墓と甜草溝 1 号墓で 2 点、甜草溝 2 号墓で 1 点が出土した (図 10)。甜草溝 M2:39 は透孔がないものの、対角線を意識して打出ししていることから正方形透飾に帰入した。さらに、この牌飾の類似品として、ピエール・ウルドリー・コレクションに収蔵されている対角線対称の双鳳文の正方形透飾がある (図 10-5)。

正方形透飾は武寧王陵、新沢 126 号墳で出土している正方形の透飾との関連性が指摘され、両例は共に被葬者頭部付近で出土していることから冠飾と考えられてきた。その場合、六朝墓で明らかになった正方形の獣面金璫との関連が問題になるだろう。しかし、三燕出土の正方形牌飾は一片 7cm と大型であり、遼西において唯一出土状況が判明する甜草溝 M2:39 は被葬者腰付近から出土した。また、甜草溝 M2:39 は、枠内側の上部に沿って左右両側よりの位置に 2 つずつの穿孔があり、この点は後述する長方形牌飾の遼西群と共通し、帯としての用途が推定される。以上から、三燕出土の正方形透飾の場合は帯に関係する装飾品と推定する。

(2) 半月形牌飾

甜草溝 1 号墓から 1 点のみ出土している (図 11)。透彫りのある前板と裏板の 2 枚をリベット接合して形成した、半円形に近い牌飾である。透彫りした前板は文様ラインにそって山形に突出させており、稜の左右には金粒を並べてさらに文様を強調している。文様は鳳凰 1、龍 4 である [12]。文様と外周上には象嵌が施されていたが、石料は残っていない。前板を大きく半円形に切り取り縁を出窓状に突出させた中央部には、房身村 2 号墓出土の頸部飾と同様、石が嵌められていた可能性がある。用途と装飾部位は不明なものの、房身 2 村号墓出土頸部飾との類似から頸部飾の可能性がある。

(3) 楕円形垂飾

甜草溝 1 号墓と 2 号墓で各 2 点が出土している (図 12)。垂飾本体の平面形は楕円形で、外形にそって狭い鍔を残しで全体を凸起した後、上側よりの位置を再び円形に窪ませた 2 枚を裏表合わせている。上部には別の金片を用いて下垂するための 2 つの環を作り、牌飾周囲の鍔には円形あるいは雫形の葉を付けている。甜草溝 2 号墓では被葬者の両肩付近で出土しており、報告者は歩揺冠のこめかみ飾りと推定している [13]。

甜草溝 1 号墓の資料は本体全体が粟粒文で装飾されており、三燕での制作が推定できる。このような楕円形垂飾は三燕以外では報告されていないため、発掘事例からは三燕独自の装身具と考えられる。しかしながら、これと類似する 2 点がピエール・ウルドゥリー・コレクションに収蔵されており (図 12 3,4)、この資

表 2　晋式帯金具一覧

No.	資料	所在地	時代	材質	構成要素(点数)	文献	備考
1	奉車都尉墓	遼寧省朝陽県龍城区他拉皋榛溝村	三燕	鍍金	龍文鉸具(1),帯先金具(1),蛇尾(1)	『文物』1994-11p35図5	「奉車都尉」銀印
2	十二台磚廠88M1:43	遼寧省朝陽県袁台子村	三燕	鍍金	鳳凰紋鉸具(1)	『文物』1997-11p30図31、『三燕文物精粋』66	
3	袁台子壁画墓M1:55	遼寧省朝陽県十二台郷袁台子村	三燕	鍍金	鳳凰紋鉸具(1),帯先金具(1)	『文物』1984-6p35図30-2、『三燕文物精粋』68	透彫板・裏板は鍍金、外框は銀
4	1988年喇嘛洞徴収	遼寧省北票市南八家子郷四家板村	三燕	鍍金	銙aか銙cの銙板(1)	『文物』1994-1p26図20-3	
5	喇嘛洞Ⅱ M101:17,18	遼寧省北票市南八家子郷四家板村	三燕	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1)	『考古学報』2004-2p.230図22-10,11、『三燕文物精粋』67	
6	喇嘛洞Ⅱ M275	遼寧省北票市南八家子郷四家板村	三燕	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙a(3),銙b(3),銙c(1)	『三燕文物精粋』72	帯先金具の文様はC字形龍2
7	喇嘛洞Ⅱ M226:44-55	遼寧省北票市南八家子郷四家板村	三燕	鉄	鉸具(1),帯先金具(1),銙b(4)ほか	『考古学報』2004-2図版16-3	銙の形態・文様はモノクロ写真で判別できない
8	洞溝M152:10	吉林省集安市(山城下)	高句麗	鍍金	銙a(1)	『考古』1983-4,p.305図7-6,図版3-5	
9	洞溝M159:5	吉林省集安市(山城下)	高句麗	鍍金	龍文帯先金具(1)	『考古』1983-4図版3-2	p.303文章記載では2点と記載
10	瑠璃河	北京市房山区瑠璃河地区董家林	―	鍍金	龍文鉸具(1)	『古代史復元7 古墳時代の工芸』p.167図292②	東潮による
11	定県43号墓	河北省定県北陵村	後漢	銀	銙a(1)	『文物』1973-11,p.10図2-4	被盗掘/中山穆王劉暢墓に比定
12	洛陽晋墓M24:6	河南省洛陽市	西晋	不明	龍文鉸具(1),銙a(1)	『考古学報』1957-1,p.180図11-5,6	点数不明
13	周處墓(宜興晋墓M1)	江蘇省宜興県周墓墩	元康七年[297]東晋	銀	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙a(4),銙b(5),銙c(4),蛇尾(1)	『考古学報』1957-4図版7-5、『考古』1972-4	「元康七年九月廿日陽羨所作周前将軍磚」ほか銘文磚/報告p.91表では17点と記載
14	上坊M1(2006NJSM1)	江蘇省南京市江寧区上坊鎮	孫呉晩期	銀	銙f(1)	『文物』2008-12p15図38	太平百銭,直百五銖(214-),大泉当千(238-)共伴/孫呉宗室ないし帝王の墓に比定
15	薛秋[子春]墓	江蘇省南京市大光路	孫呉中晩期	銀	龍文鉸具(1),帯先金具(1),銙b(4),銙c(5),蛇尾(1)	『文物』2008-3,p.8図7	銙b銙板は人物立像,垂飾板は騎龍羽人/太平百銖,直百五銖(蜀銭214-)共伴/折鋒校尉,沛国竹邑東郷安平里,公乗,薛秋,年六十六,字子春
16	南京大学北園墓	江蘇省南京市江口路22号	東晋早期	鍍金	銙f(点数不明/3片)	『文物』1973-4、東2006	報告中の「錯金銅片」
17	熊家嶺(87HXM14)	湖北省武漢市漢陽県熊家嶺	東晋前期	鍍金	龍文鉸具(1),帯先金具(1),銙d(1),銙f(7)	『考古』1994-10,p.954	銙dは琵琶形蓮華紋(遊環なし)
18	劉弘[和季]墓	湖南省安郷県黄山頭	西晋	銀	帯先金具(外框1)	『文物』1993-11,p.1図9	「鎮南将軍章」他/『晋書』劉弘伝
19	大刀山	広東省広州市西郊(大刀山)	太寧2年[324]東晋	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙d(1),銙f(15),蛇尾(1)	『考古学雑誌』創刊号p.123図12,p.124図13	銙dは琵琶形蓮華紋
20	夢村土城	韓国ソウル市	馬韓-百済	鍍金	銙f(1)	金元龍1987、朴淳発1997、東2006	第1号住居址埋土層(Ⅵ)出土
21	新山古墳	奈良県北葛城郡広陵町大字大塚	古墳前期	鍍金	龍文鉸具(1),帯先金具(1),銙a(12),銙d(1)	『佐味田及新山古墳研究』、『考古学雑誌』50-4p5図3	書陵部蔵/梅原:銙a1点は京都大学蔵(鍍銀)
22	行者塚古墳	兵庫県加古川市山手二丁目	古墳中期	鍍金	龍文鉸具(1),帯先金具(1),銙a(1),銙c(2)	『行者塚古墳発掘調査概報』p.53,54	
23	京都大学総合博物館蔵	伝中国出土	－	鍍金	龍文鉸具(1),銙b(2),銙c(2),銙aか銙cの銙板部(3)	『王者の武装』p.9	
24	伝慶尚北道出土	伝韓国慶尚北道龍城付近出土	－	鍍金	銙a(1),銙b(5),銙c(1)	『考古学雑誌』20-11,巻頭写真	東京国立博物館蔵
25	鄂爾多斯博物館蔵	－	－	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙b(4),銙e(5),蛇尾(1)	『内蒙古文物考古』2010-1図版4	
26	天理参考館蔵	－	－	鍍金	龍文鉸具(1),帯先金具(1),銙a(1),銙b(2),銙c(3),蛇尾(1)	天理『シルクロードの古代文物』48、『六朝の文物』35	
27	出光美術館蔵	－	－	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1)	『出光美術館館報』32表紙,巻頭	メイヤー・コレクションのカタログ(1974)収載品
28	近つ飛鳥博物館蔵	－	－	鍍金	銙b(銙板部2,垂飾板2)	『近つ飛鳥博物館館報4』p42図1	清野謙次コレクション
29	近つ飛鳥博物館蔵		－	鍍金	銙b(垂飾板1)	『平成14年度秋期企画展 西域への道』No.16	文様は鳳凰2
30	国立歴史民俗博物館蔵	－	－	鍍金	点数・セット関係を把握していない	『アジアの境界を越えて』p.12、『立命考古学論集Ⅲ』p.958	藤井は3組あげる/藤井にない銙が図録に掲載(双鳳の付く銙d:歴博A-196)
31	夢蝶軒coll.(BP-017.1-.11)	－	－	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙b(4),銙e(4),蛇尾(1)	*Adornment for Eternity*, p.133	
32	夢蝶軒coll.(GI-017)	－	－	鍍金	帯先金具(1),銙a(2),銙b(2),銙c(3),銙e(1)	*Ancient China and Ordos Bronzes* ,No.43	帯先金具の文様はC字形龍2
33	夢蝶軒coll.(GI-018)	－	－	鍍銀	龍文帯先金具(1),銙a(2),銙b(3),銙c(3)	*Adornment for Eternity*, cat.no.50b p.132	
34	Charlotte C.and John C.Weber	－	－	鍍金	龍紋鉸具(1),帯先金具(1),銙b(1),銙e(1)	*The Metropolitan Museum of Art Bulletin, Summer 1990* fig.67-70	メトロポリタン博物館蔵
35	スエーデン東洋博物館	－	－	鍍金	龍文鉸具(1)	『考古学雑誌』50-4,p.6図5左	梅原末治論文
36	ボストン山中商会旧蔵	－	－	鍍金	銙b(1)	『考古学雑誌』50-4,p.6図5右	梅原末治論文
37	繭山順吉氏蔵	－	－	鍍金	銙a(3)	『考古学雑誌』50-4,p.6図4	梅原末治論文
38	『六朝の美術』図録2-32	－	－	鍍金	龍文帯先金具(1)	『六朝の美術』企画展図録2-32	主紋様は龍文だがその他紋様が多く入る

＊1　帯金具名称は註17参照。　＊2　材質の鍍金・鍍銀は青銅鍍金、青銅鍍銀の略

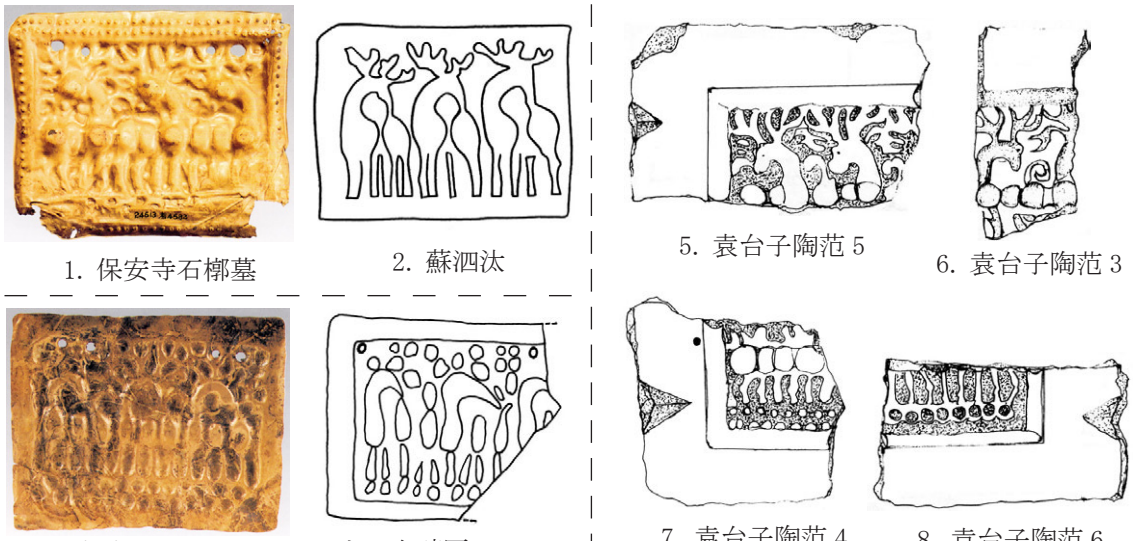
No.	資料	所在地	材質	文献	横×竪
1	十二台鄉磚廠M8713:7	遼寧省朝陽県袁台子村	金	『文物』1997-11,p.1	(6)×5
2	保安寺石槨墓	遼寧省義県劉龍溝公社	金	『三燕文物精粋』No.13	8.5×7
3	喇嘛洞ⅡM192	遼寧省北票市南八家子鄉四家板村	金	6、『三燕文物精粋』,No.15	7.9×6.4
4	袁台子陶范3	遼寧省朝陽県十二台鄉袁台子村	－	『北方文物』2009-2,p.44-3,図版2-3	正范(凸)
5	袁台子陶范4	遼寧省朝陽県十二台鄉袁台子村	－	『北方文物』2009-2,p.44-5,図版2-3	負范(凹)
6	袁台子陶范5	遼寧省朝陽県十二台鄉袁台子村	－	『北方文物』2009-2,p.44-9	負范(凹)
7	袁台子陶范6	遼寧省朝陽県十二台鄉袁台子村	－	『北方文物』2009-2,p.44-4	負范(凹)
8	札賚諾爾1959年(3件)	内蒙古呼倫貝爾盟満州里市札賚諾爾鉱区	鍍金	『文物』1961-9,p.17	－
9	札賚諾爾1983年採集	内蒙古呼倫貝爾盟満州里市札賚諾爾鉱区	金	『北方文物』1987-3封二	－
10	札賚諾爾M3002:2	内蒙古呼倫貝爾盟満州里市札賚諾爾鉱区	鍍金	『内蒙古文物考古文集1』p.377	6.6×4.1
11	和日木図採集(LHC:1)	内蒙古錫林郭勒盟正藍旗伊和海爾罕蘇木	鍍金	『内蒙古地区鮮卑墓葬的』p.104,彩版5-4	8×5.2
12	三道湾	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗紅格爾図郷		『内蒙古文物考古文集』第1輯,彩色図版1左上	－
13	三道湾M2:32	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗紅格爾図郷	金	『内蒙古地区鮮卑墓葬的』p.33	(4.8)×5.2
14	二蘭虎溝	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗察汗淖郷	青銅	『内蒙古文物資料選輯』図版22-107	7.3×4.7
15	井灘村出土	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗井灘村?	金	『草原文化』No.138、『成吉思汗』p.142	6.7×4
16	蘇泗汰墓葬	内蒙古赤峰市林西県十二吐鄉蘇泗汰村	金	『内蒙古文物考古文集2』p.462	7.8×6.2
17	善家堡M5:14	山西省朔州市右玉県右衛鎮善家堡村	金	『文物季刊』1992-4 p.12図17-4,図版4-10	(4.4)×5.8
18	二克浅M36:6	黒竜江省訥河市二克浅鎮	包金	『考古』2003-2,p.18図13-6,図版1-5	7×4.5
19	清苑出土(C3560)	河北省清苑出土	青銅	『文物春秋』1991-4,p.16,No.72	5.8×4
20	旧綏遠出土(G34)	旧綏遠	?	『文物春秋』1991-4 p.16,No.73	7.5×4.8
21	瑞典極東考古博物館 K.11247:2 Larson coll.	オルドス	青銅	*Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities No.4*,PL.24-7、『内蒙古・長城地帯』第73図19	6.45×4.1
22	デンマーク国立博物館	内蒙古	青銅	『古代学』1-3,p262図5	－
23	故宮博物院	－	青銅	『故宮博物院院刊』1993-1図17	7.7×4.8
24	東京国立博物館TJ-3947	－	青銅	『中国北方系青銅器:東京国立博物館蔵』p.157	7.5×4.8
25	東京国立博TJ-3995(右)	－	青銅	『中国北方系青銅器:東京国立博物館蔵』p.158	(2.5)×4.5
26	東京国立博TJ-3995(左)	－	青銅	『中国北方系青銅器:東京国立博物館蔵』p.158	(2.7)×(2.4)
27	東京国立博物館TJ-5698	－	青銅	『中国北方系青銅器:東京国立博物館蔵』p.157	8.0×5.0
28	天理参考館蔵	－	青銅	『天理参考館報』18図版Ⅳ-d、『大草原の騎馬民族』227	横7.8
29	C. T. Loo collection	－	青銅	*Sino-Siberian Art in the Collection of C.T.Loo*,PL28-5、*Сибирские поясные ажурные пластины:II в.до н.э.-I в. н.э .*,рис.3-3	横8
30	The Arther M. Sackler Foundation(V-7147)	－	青銅	*Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes(from the Arthur M.Sackler collection)*,p.281	7.7×5
31	The Arther M. Sackler Foundation(V-7050)	－	青銅	*Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes(from the Arthur M.Sackler collection)*,p.282	8×5.5
32	ベルリン美術館,東アジア美術館 Inv.Nr.1965-30	－	青銅	*Nomadenkunst*,No.11	8.0×5.1
33	Joseph G. Gerena Fine Art	－	金	*Nomadic Art of the Eurasian Steppes*,No.154	4.8×7.6
34	J. J. Lally&Co.	－	金	*Nomadic Art of the Eurasian Steppes*,No.152	5.4×7.8

表4　双羊文牌飾一覧

No.	資料	所在地	材質	文献	横×竪
1	喇嘛洞ⅠM13	遼寧省北票市南八家子鄉四家板村	金	『三燕文物精粋』No.14	8.9×7.2
2	添密梁	内蒙古呼和浩特市太平庄鄉添密梁	金	『中国文物精華大全図』p.95,No.33	9.5×7
3	呼大公路工事区	内蒙古呼和浩特市托克托県(呼和浩特-大同間高速沿線)	青銅	『托克托文物志』p.404	4.3×2.6
4	C.T.Loo collection	Found in Yu-ling hu(榆林府)	青銅	*Exhibition of Chinese arts 1941-42*,No.116	3 1/4 inch
5	C.T.Loo collection	－	青銅	*Sino-Siberian Art in the Collection of C.T.Loo*,PL.28-4	横9.8
6	個人蔵	－	鍍金	『中国戦国時代の美術』p.149 No.249	9.5×7.0
7	大英博物館蔵	－	青銅	*Art of the Steppes*,p.128 pl.28最下	約6.5×5
8	J.J.Lally&Co.	－	青銅	*Nomadic Art of the Eastern Eurasian Steppes*,No.117	10.5×9.7

表5　双鹿文牌飾一覧

No.	資料	所在地	材質	文献	横×竪
1	袁台子陶范1	遼寧省朝陽県十二台鄉袁台子村	－	『北方文物』2009-2,p.44-9,図版2-1	正范(凸)
2	扎賚諾爾1959年	内蒙古呼倫貝爾盟満州里市札賚諾爾鉱区	鍍金	『文物』1961-9,p.17図4-2、著者スケッチ	(4)×5.7
3	三道湾M20:1	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗紅格爾図郷	金	『内蒙古地区鮮卑墓葬的』p.33,彩版4-3	7.1×5.3
4	二蘭虎溝	内蒙古烏蘭察布盟察右後旗察汗淖郷	青銅	『内蒙古文物資料選輯』図版22-109、『鄂爾多斯式青銅器』p.72	7.5×5.7
5	張家口市出土(C2277)	河北省張家口市1959年出土	青銅	『河北省出土文物選集』No.286、『文物春秋』1991-4,p14,60	7.5×5.6
6	吉林大学蔵	－	青銅	『北方文物』1992-3,表紙封6(吉林大学標本室提供)	7.3×5.2
7	Estate of Arther M. Sackler (V-7144)	－	青銅	*Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes(from the Arthur M.Sackler Collection)*,p.280	7.3×5.4
8	東京国立博物館TJ-3995	－	青銅	『東京国立博物館蔵 中国北方草原古代青銅器』p.158	(2.5)×4.5
9	C. T. Loo collection	－	青銅	*Sino-Siberian Art in the Collection of C.T.Loo*,pl28-6、*Сибирские поясные ажурные пластины:II в.до н.э.-I в.н.э.* ,рис.2-3	横8.1



1．保安寺石槨墓　2．蘇泗汰　5．袁台子陶范 5　6．袁台子陶范 3　3．喇嘛洞ⅡM192　4．十二台磚廠 M8713:7　7．袁台子陶范 4　8．袁台子陶范 6

図 12　遼西地区出土の三鹿文牌飾

1．喇嘛洞ⅠM13:3　2．托克托県呼大公路　3．添蜜梁　4．楡林府

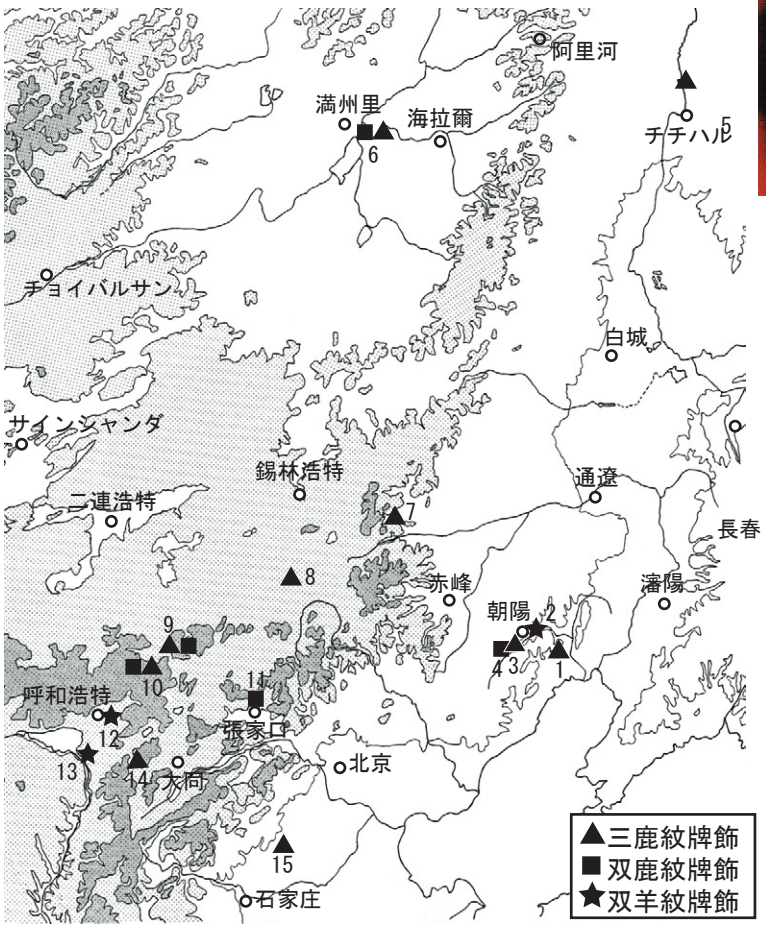
5.British Museum　6.C.T.Loo collection　7.J.J.Lally&Co.　8．個人蔵

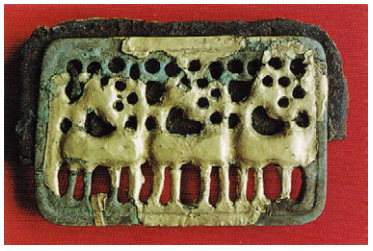
図 13　双羊文牌飾

1．袁台子陶范 1　2．張家口出土　3．三道湾 M20:1　4．扎賚諾爾 1959 年

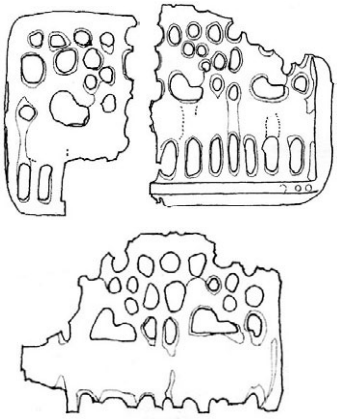
5．二蘭虎溝　6．吉林大学蔵　7.M.Sackler collection (v-7144)　8．東京国立博物館 TJ-3995

図 14　双鹿文牌飾

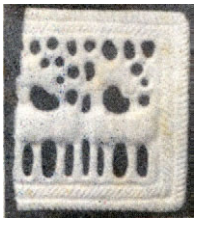




1. 二克浅M36:6

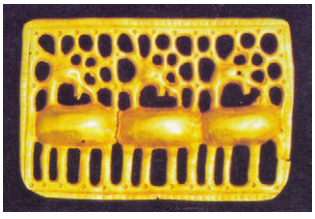


2. 扎賚諾爾1959年出土



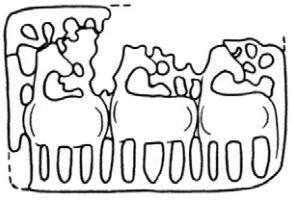
3. 扎賚諾爾1983年

1. 保安寺石槨墓 2. 喇嘛洞 3. 十二台営子 4. 袁台子 5. 二克浅
6. 扎賚諾爾 7. 蘇泗汰 8. 和日木図 9. 三道湾 10. 二藍虎溝
（11. 張北出土） 12. 添蜜梁 13. 托克托県 14. 善家堡 15. 清苑



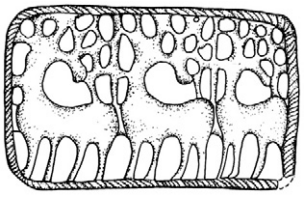
4. 三道湾

5. 井灘村

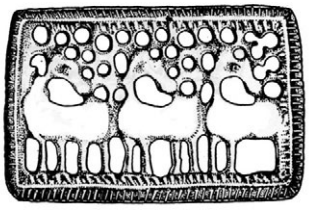


6. 扎賚諾爾M3002:2

6. 善家堡M5:14

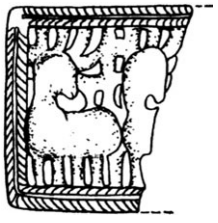


7. 和日木図採集



8. 二藍虎溝

9. 河北省清苑出土



10. 三道湾M2:32

図16　三鹿文牌飾出土遺跡分布図と蒙古高原出土の三鹿紋牌飾

料は金粒に加えて三燕の装身具には現在のところ例のない緑松石の象嵌で装飾されている。そのため、楕円形垂飾が六朝墓にも存在した可能性を残している。

(4) 長方形牌飾

遼西の三燕期の遺跡で出土した長方形牌飾はいずれも動物文で、動物の種類と頭数によって三鹿文牌飾、双鹿文牌飾、双羊文牌飾に三分類できる。類似する文様の牌飾は蒙古高原で出土しているが、内蒙古側の資料が鋳造であるのに対して、三燕の長方形牌飾は金片打ち出しによって制作しており、文様の差を越えて制作手法の面から遼西群が設定できる。

三鹿文牌飾

三鹿文牌飾は、後方を振り返る鹿 3 頭が並び立つ文様の牌飾と定義される。しかしながら、報告では漠然と三鹿文牌飾と呼んでいる場合もあり、三燕墓葬から出土した長方形牌飾も全て“三鹿文牌飾”と呼称されてきた。従来の三燕出土の三鹿文牌飾 4 点の内部文様を検討すると、1 点は三鹿文とは異なるモチーフであることを最初に指摘する。

以上のように定義した上での三鹿文牌飾は 11 遺跡で 14 点が出土しており、参考資料も含めると 32 点の例がある (表 3)。制作方法の異なる遼西群を除くと、三鹿文牌飾は大興安嶺以西の蒙古高原に分布する魏晋期の墓葬から出土している (図 16)。内蒙古高原側で出土する三鹿文牌飾について文様細部を検討すると、鹿角、胴体、脚、枠の形態に個体差があり、そのうち鹿角については円形の透孔による表現を基本とする。透孔には一定の配列パターンがあり、鹿一単位について左から右方向に数えて「(首より左)3、(首より右)2、3、3」が基本となる。一方、文様として残る角部分の方に注目したため、角張った透孔になったものも存在し、この牌飾では文様の崩れも認められる (図 16-9,10)。

次に遼西群の三鹿文牌飾を検討する。遼西群の三鹿文牌飾は全体的に文様の崩れが進んでおり、鹿の胴体は前肢付け根・腹部・後肢付け根を意味する極端な 3 つの隆起で表現されている。遼西群でも角表現の違いから、本来透孔となる窪みが円形を保っている喇嘛洞 192 号墓と十二台磚廠 8713 号墓、角の方が強調された保安寺石槨墓と蘇泗汰(ソスタイ)[15] に分けられる (図 13 1-4)。前者もすでに透孔の配列が規則性を失い、また鹿の脚先と枠の間には列点文帯が入る。さらに付け加えると、保安寺石槨墓出土資料の場合、他の牌飾と同じく文様凸面を表とすると鹿の頭向が逆になってしまっている。

三燕では鋳造による三鹿文牌飾の出土例がないものの、袁台子で 4 点の陶范が出土している。文様は遼西群と同じく後出の退化した段階のものである (図 13 5-8)。

双羊文牌飾

2 匹の羊が 3 つの車輪状の環をはさんで対峙する文様構成であり、本来は羊の脚部も車輪状である。4 遺跡で各 1 点が出土し、参考資料を合わせると 8 点の資料が知られている (図 14)。従来三鹿文牌飾と言われていた喇嘛洞 I M13:3(図 14-1) は文様構成からみて双羊文の範疇に入れて良いだろう。双羊文牌飾が出土した年代の推定できる遺跡は添蜜梁のみで、北魏期と考えられている[16]。遼西群の 1 点を除くといずれも内蒙古高原側で出土している。

双鹿文牌飾

2 匹の鹿が円形の環列をはさんで対峙する文様構成の牌飾である。4 遺跡で各 1 点が出土し、参考資料を合わせると 7 点の資料が知られている (図 15)。この牌飾も内蒙古高原側に分布する魏晋期の墓葬から出土している。内蒙古高原側出土の牌飾を細かく観察すると、鹿の透孔の形状と配列の違いから二群に分かれる[17]。遼西地区で出土したこの牌飾に関連する遺物は、袁台子で出土した陶范である (図 15-1)。陶范 1 は遼西群の三鹿文牌飾と同じく文様退化に伴って加わった枠と脚下の間の列点文帯があり、後出の要素を示している。この范と同じ文様の牌飾は確認されていない。

最後に長方形牌飾の用途について言及したい。内蒙古出土の鋳造による三鹿文牌飾は、墓葬中での出土位置が報告された例がないものの、帯飾としての用途が推定される。その理由としては、黒龍江省訥河市の二克浅(アルカチン) 36 号墓で三鹿文牌飾が木製の浅い盤状の台に嵌められた状態で出土したことが挙げられる。牌飾の背面に木製の台がつくのは、シベリアのディレストゥイ墓地 107 号墓 (Дырестуй могильник) のように鉸具としての機能を持った長方形の帯飾板にしばしばみられる。そして、打出しによる遼西群の長方形牌飾の場合も帯飾としての用途が推定される。遼西群の牌飾は、上部の枠と文様部の境目の左右寄りの位置に 1 ～ 2 個の孔があけられている。これは牌飾に透孔がないこ

とから施された装着のための穿孔であろう。この穿孔は正方形透飾に帰入した甜草溝 M2:39 とも共通する。前述したが、甜草溝 M2:39 は被葬者腰部付近で出土しており、牌飾の構造と用途に関係性を見出すならば、遼西群も帯飾と推定される。

III. 結語

三燕墓葬で出土した金属製装身具について、個別装身具ごとに集成と検討を行ってきた。その結果、三燕の金属製装身具は、①三燕独自の装身具 (歩揺、半月板帯葉耳飾と円形葉耳飾、頸部飾 (半月形金牌飾)、正方形透飾、半月形牌飾、楕円形懸飾)、①六朝と共通する装身具 (晋式帯金具、金璫)、③後漢以来の東北平原の装身具 (扭絲帯葉耳飾)、④内蒙古高原側の系譜をひく装身具 (長方形牌飾 (遼西群)) から構成されることが明らかになった。三燕の金属製装身具は周辺地域の装身具を取り込んでいる。しかし、晋式帯金具の一部が搬入品である以外は、その装身具を独自に生産していたことが製作技法や装飾手法の点からうかがえる。

また、袁台子で出土した陶范から、金属製装身具の生産にかかわる遺物が初めて明らかになった。しかし鋳造によって生産された装身具は三燕墓葬で出土しておらず、范に刻まれた装身具も本来内蒙古側に分布をもつ種類の装身具である。范に刻まれた装身具は型式学的な文様の変化からみて内蒙古で出土している製品よりも後出段階のものとみられ、范に刻まれた装身具と同じ形態・文様の遺物は出土例がない。袁台子の陶范もまた、内蒙古側から三燕に取り込んだ装身具の一端を示す資料といえるだろう。

今後の検討課題としては、今回は三燕期と一括した三燕各期の変化の様相をとらえること、また喇嘛洞墓地のような墓葬が群集して営まれている墓地と独立して形成されている墓地間での差などを考慮した検討ができればよいと考えている。

謝辞

本稿は平成 19 年度、徳島大学大学院に提出した修士論文『中国北方金属製装身具の研究－２～５世紀の鮮卑比定遺跡を中心として－』の三燕に関連する資料をもとに六朝の資料を加えてまとめなおしたものです。修士論文の執筆にあたっては東潮、葭森健介先生からの指導をいただきました。また、吉林大学留学中には魏存成先生に指導していただき、魏堅先生に多くの遺跡の見学をかなえていただきました。その他下記の多くの方々にお世話になりました。感謝いたします。また、本論の作成にあたっては金沢大学大学院「プロジェクト研究を通じた自立的研究者養成」プログラム、文化女子大学の「服飾文化共同研究」に関わる共同研究を通じて遺物・遺跡の資料調査を行っています。

高濱秀 (金沢大学)、定森秀夫 (滋賀県立大学)、東潮、葭森健介 (徳島大学)、傅寧 (内蒙古博物院)、陳永志、蓋志勇 (内蒙古文物考古研究所)、王培新、魏存成、于閏儀 (吉林大学) 、魏堅 (中国人民大学)、李新全、田立坤、万欣、張桂霞 (遼寧省考古研究所)、尚暁波 (遼寧省朝陽市博物館)[五十音 / 拼音順]

註

(1) 中国においては同一種類の装身具であっても金、銀、金銅 (青銅鍍金)、鉄地鍍金など異なる素材が使用されている。本論では素材の別にはこだわらないため、総称として金属製装身具の語を使っている。

(2)『晋書』慕容廆載記。

(3) 報告では、金璫 4 点と共に一辺 6.8cm の枡状の青銅製品と 5 個の小珠を象嵌するための円形孔のある長 6.8cm、幅 3mm の帯状金片が出土したとある。枡状の青銅製品は底にあたる面中央に小さな方形孔、帯状金片は両端に各 1 個の小さな穴があり、長 9mm の銀合金釘が遺存するものもあった。この帯状金片の裏面には少量の漆膜があったことから、報告者はこれら遺物を漆盒に関連する遺物と認識して報告している。復元案では、漆器は一辺 6.8cm、厚さ 1cm の木胎漆器で、四立面上を帯状金片で縁取りし、正面に蝉形金璫、背面に獣面金璫、左右の面に騎龍羽人金璫を配し、騎龍羽人金璫の周囲はさらに多くのより細い帯状金片を用いて装飾をしたする (枡状の青銅製品はその蓋)。出土状況は良好で金璫以外にも冠に関連する遺物がある可能性が高く、冠全体の構造を考察できる可能性もあることから資料の公表と検討が期待される。

(4)「郎中侍従者、着貂羽黄金附蝉、皆号侍中」

(5) 大和文華館は外区が唐草文帯である。ストックレー・コレクションの金璫は大和文華館の双鳳文金璫と似るが、外区が異なり、間隔のひらいた鋸歯文である。サイモン・クワン・コレクションの場合も鋸歯文帯だが、全体形が他とは異なる。

(6) 耳飾の分類は筆者による。A 式は最下部が小環の金属線のねじり合わせのみで制作された棒状の耳飾で、ねじり合わせる途中で左右に小環を作り出す例が多い。B式 (扭絲穿管玉耳飾) は金属線をねじり合わせた中間部分に２～４個の管玉を通し、最下部の小環にも珠を通すものである。C 式は最下部の環を大きく作り出したもので、最下部の環の作り方は多様で珠を通すものもある。そして、D 式が扭絲帯葉耳飾である。

(7) 飛地の２遺跡とは図８分布図上の g. 後宝地と h. 塔である。後宝地遺跡のある吉林省白城市周辺は、大興安嶺に源を発する河川が合流し松花江となる地点に近く、東北平原に位置していながら内蒙古高原からの影響も受ける地域である。図８では両遺跡を含む形で分布範囲の線を引いている。

(8) 単環耳飾 (図 8 参考図) とは金属線で上部に装着のための鈎、下部に 1 つの大きな環を作り出した耳飾である。中国においては 6 遺跡で 15 点出土している。なお、渦文耳飾、単環耳飾ともに耳飾の分類は筆者による。

(9) 十二台磚廠 9002 号墓は墓葬平面図が掲載され半月形金牌飾の出土位置が判明するが、被葬者頭部から右の離れた位置で出土しており、出土状況からは頸部飾と確定できない。

(10) 『文物季刊』1992-4 p.14 図 18 に写真が掲載されている。

(11) 図 10 では右上から左下に対称軸がくるように配置している。房身 2 号墓は共に対称軸に頭を向けた鳳凰が四分割された三角形の上・右と下・左において対称である。甜草溝 M1:9 は上・右に頭対称の龍、下・左に背対称の鳳凰を配置している。

(12) 弦にそって鳳凰が 1 匹、弧線の中央をはさんで外周に背を向けた姿勢で対峙する龍 2 匹と、半円の角に頭を向けて外周に腹側が向く龍 1 匹である。

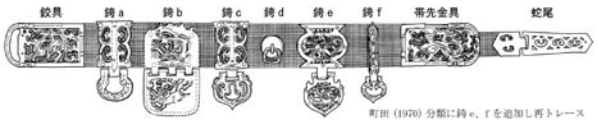
(13) 甜草溝 1 号墓は調査時には既に破壊されていたが、2 号墓は保存状況が良好であった。報告 p.37 左列最下行の文章記載と p.35 図 5 参照。報告者の「歩揺冠耳部垂飾」をこめかみ飾りと訳した。

(14) 報告では三鹿文を透彫りするとも、打出しによって製作するとも書かれている。しかし、図面では線がつながっておらず凹凸を表現していると考えられるため、打出しによる遼西群の資料と考えた。

(15) 年代は魏堅主編 2004 所収の孫危「内蒙古地区鮮卑墓葬的初歩研究」の編年案による。筆者は文献を入手できておらず未読であるが、孫危は原平「鮮卑金牌飾及箆紋陶罐」『呼和浩特文物』1 期を添密梁の参考文献として挙げている。

(16) 図 15 1-4,8 と図 15 5-7 に分かれる。前者と後者の違いは、鹿の首～背にかけての透孔が前者は L 字形であるのに対して、後者は背中から出た線によって分割されている点などで確認され、後者の方が斉一性が強い。

(17) 帯金具を構成する金具の分類は町田 (1970) に従い、銙 e,f を追加した。銙 e は勝形の銙板と心葉形の垂飾からなるもの、銙 f は銙板の幅が狭く圭形をしたものを指す。



引用・参考文献

［日本語］

田淵義三 1952「内蒙に於ける丁抹考古学者の調査」『古代学』第 1 巻 3 号 古代学協会

梅原末治 1955「中国出土の漢六朝の細金細工品に就いて」『大和文華』16 大和文華館出版部

町田章 1970「古代帯金具考」『考古学雑誌』56-1(『古代東アジアの装飾墓』同朋社 1987 年に再掲)

中野徹 1976「金工」『六朝の美術』大阪市立美術館編 平凡社

戸川芳郎 1979「貂蟬－蟬賦と侍臣－」『加賀博士退官記念 中国文史哲学論集』講談社

大阪市立美術館 1991『中国戦国時代の美術－金の輝きと精緻の技－』

和泉市久保惣記念美術館編 2001『第三次久保惣コレクション－江口治郎コレクション－』

小田木治太郎 2004「中国遼寧省の遺跡と博物館および天理参考館蔵の北方系帯飾板」『天理参考館報』第 18 号 天理大学出版部

東京国立博物館 2005『中国北方系青銅器 : 東京国立博物館所蔵』竹林舎

曽布川寛・出川哲朗監修 2005『中国☆美の十字路展』大広

毛利光俊彦 2005「中国古代北方民族の冠」『東アジア考古学論叢－日中共同研究論文集－』日本奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究所

町田章 2005「鮮卑の帯金具」『東アジア考古学論叢－日中共同研究論文集－』日本奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究所

東潮 2006「晋式帯金具と馬韓・百済」『Ⅱ倭の五王の時代の国際関係に関する研究』(平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B)(1) 研究成果報告書 , 研究課題番号 14310187, 研究代表者 東潮)

邵清隆監修・吉田順一監修協力 2008『中国・内モンゴル自治区博物館所蔵 チンギス・ハーンとモンゴルの至宝展』図録

国立歴史民俗博物館 2010『平成 22 年度人間文化研究機構連携展示 アジアの境界を越えて』

［中国語］

陸大為 1960「遼寧北票房身村晋墓発掘簡報」『考古』1960-1

内蒙古文物工作隊 1961「内蒙古扎賚諾尓古墓群発掘簡報」『考古』1961-12

鄭隆・李逸友 1964「察右後旗二蘭虎溝古墓群」『内蒙古文物資料選輯』内蒙古人民出版社

黎瑶渤 1973「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973-3

南京大学歴史系考古組 1973「南京大学北園東晋墓」『文物』1973-4

敦煌文物研究所 1974「敦煌晋墓」『考古』1974-3

鄒厚本 1979「東晋張鎮碑誌考釈」『文博通訊』27 南京博物院編

河北省博物館・文物管理処編 1980『河北省出土文物選集』文物出版社

孫国平 1981「試論鮮卑族的歩揺冠飾」『遼寧省考古、博物館学会成立大会会報』遼寧省考古、博物館学会編

金唯諾主編 1984『中国美術全集』絵画篇 2 隋唐五代絵画 人民美術出版社

王成 1987「扎賚諾爾圏河古墓清理簡報」『北方文物』1987-3

陸思賢・陳棠棟 1984「達茂旗出土的古代北方民族金飾件」『文物』1984-1

吉林省考古研究室・集安県博物館 1984「集安高句麗考古的新收穫」『文物』1984-1

遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館 1984「朝陽袁台子東晋壁画墓」『考古』1984-6

吉林省文物考古研究所 1987『楡樹老河深』文物出版社

孫機 1989「進賢冠與武弁大冠」『中国歴史博物館館報』総

13•14 期 (『中国古輿服論叢』文物出版社 2001 再掲)
田立坤 1991「三燕文化遺存初歩研究」『遼海文物学刊』1991-1
鄭紹宗 1991「略論中国北部長城地帯発現的動物紋青銅飾牌」『文物春秋』1991-4
孫機 1991「歩摇、歩摇冠與摇葉飾片」『文物』1991-11
王丹 1992「吉林大学蔵北方青銅器」『北方文物』1992-3
王克林・寧立新・孫春林・胡生 1992「山西省右玉県善家堡墓地」『文物季刊』1992-4
王海文 1993「故宮博物院蔵鄂爾多斯式青銅器」『故宮博物院院刊』1993-1
国家文物局主編 1994『中国文物精華大全 金銀玉石巻』商務印書館
烏蘭察布博物館 1994「察右後旗三道湾墓地」『内蒙古文物考古文集』第 1 輯 中国大百科全書出版社
内蒙古文物考古研究所 1994「扎賚諾爾古墓群 1986 年清理発掘報告」『内蒙古文物考古文集』第 1 輯 中国大百科全書出版社
陳鳳山・白勁松 1994「内蒙古扎賚諾爾鮮卑墓」『内蒙古文物考古』1994-2
林西県文物管理所 1997「林西県蘇泗汰鮮卑墓葬」『内蒙古文物考古文集』第 2 輯 中国大百科全書出版社
陳万雄主編 1996『中国地域文化大系 草原文化－遊牧民族的広闊舞台』商務印書館
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・朝陽県文物管理所 1997「遼寧朝陽甜草溝晋墓」『文物』1997-11
喬梁 1999「鮮卑遺存的認定與研究」『中國考古學的跨世紀反思』下 商務印書館
孫機 1999「貂蝉冠上的金璫」『中国文物報』1999.4.28
南京市博物館 2001「江蘇南京仙鶴観東晋墓」『文物』2001-3
遼寧省文物考古研究所編 2002『三燕文物精粋』遼寧人民出版社
南京市博物館 2002「南京北郊東晋温嶠墓」『文物』2002-7
黒龍江省文物考古研究所 2003「黒竜江訥河市二克浅青銅時代至早期鉄器時代墓葬」『考古』2003-2
万欣 2003「鮮卑墓葬、三燕史迹與金步摇飾的発現與研究」『遼寧考古文集』遼寧省文物考古研究所編
魏堅主編 2004『内蒙古地区鮮卑墓葬的発現與研究』科学出版社
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地 1998 年発掘報告」『考古学報』2004-2
山東鄒城市文物局 2005「山東鄒城西晋劉宝墓」『文物』2005-1
山東省文物考古研究所・臨沂市文化局 2005「山東臨沂洗硯池晋墓」『文物』2005-7
山西大学歴史文化学院・山西省考古研究所・大同市博物館 2006『大同南郊北魏墓葬』科学出版社
『托克托文物志』編纂委員会編 2006『托克托文物志』中華書局
南京大学歴史系考古専業・湖北省文物考古研究所・鄂城市博物館編著 2007『鄂城六朝墓』科学出版社
国家文物局主編 2008「甘粛省高台地埂坡魏晋墓」『2007 中国重要考古発現』文物出版社
張学鋒 2008「山東臨沂洗硯池晋墓墓主身分蠡測－以随葬品的考察為中心」『文史』2008-1
南京市博物館 2008「南京市郭家山東晋温氏家族墓」『考古』2008-6
于俊玉・孫玉鉄 2009「遼寧朝陽袁台子発現漢魏鮮卑牌飾陶范」『北方文物』2009-2
吉林省文物考古研究所・集安市博物館・吉林省博物院 2010『集安出土高句麗文物集粋』科学出版社
張恒金・張暁嵐・周双林 2010「鄂爾多斯博物館館蔵北魏鎏金帯飾的保護」『内蒙古文物考古』2010-1

［朝鮮語］

金元龍 1987「서울夢村土城出土의 金銅具에 대하여」『仏教와諸科学』東國大学校開校八十周年記念論叢 東國大学校 (『韓國美術史研究』一志社 ,1987 年に再掲)
朴淳発 1997「漢城百濟의 中央과 地方」『百濟研究叢書 5 百濟의 中央과 地方』忠南大学校百済研究所
東潮 2003「中國東北地区과 高句麗文物의 비교연구」『제 27 회 한국고고학전국대회 고구려 고고학의 제문제』韓國考古學会

［欧文］

Andersson J. G., 1932, Hunting Magic in the Animal Style, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities No.4*, Stockholm
Salmony Alfred, 1933, *Sino-Siberian Art in the Collection of C. T. Loo*, Paris: C.T. Loo
Visser H.F.E., 1948, *Asiatic Art*, New York: Beechhurst Press
Jettmar Karl, 1967, *Art of the Steppes*, New York: Greystone press
Watt C. Y. James, 1990, The Arts of Ancient China, *The Metropolitan Museum of Art Bulletin, Summer 1990 (volume XLVIII, Number1)*, New York: The Metropolitan Museum of Art
Museum Rietberg Zürich, 1994, *Chinesisches Gold und Silber: die Sammlung Pierre Uldry*, Zürich：Museum Rietberg
White J. M., Bunker E. C., 1994, *Adornment for Eternity: Status and Rank in Chinese Ornament*, Denver: Denver Art Museum
Bunker E. C., 1997, *Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes (from the Arthur M. Sackler collection)*, New York: The Arthur M. Sackler Foundation
Lee Nancy Chang, 1997, Art Collection in Hong Kong, *Orientations, vol. 28-6, June 1997*, Hong Kong：Orientation magazine Ltd.
Desroches Jean-Paul et al, 2003, *Mongolie: le Premier Empire des Steppes*, Arles: Actes sud, Mission archéologique française en Mongolie
Wagner von Mayke, Butz Herbert, 2007, *Nomadenkunst: Ordosbronzen der Ostasiatischen*, Kunstsammlung: Museum für Asiatische Kunst, Staatliche Museen zu Berlin, Mainz: Philipp Von Zabern

＊表 2 晋式帯金具一覧の文献は紙幅の都合上、欧文を除いて改めて参考文献に明記していない。